

シンガポールにおける多文化教育 —中等学校社会科教科書分析を中心に—

奥村 みさ*

はじめに

本論の目的は、多民族国家シンガポールにおける多文化主義政策の特徴について考察し、その実践例として中等学校（以下、「中学」と略）社会科教科書を取り上げ、シラバスとテキストを検証・分析することにある。シンガポールは学校教育を人材資源育成のための国民教育の一環としてとらえ、教科書のシラバスやテキストにはその教育理念が落とし込まれている。「教科の中でも『社会』こそ『国家の意図するカリキュラム』と学力観が最も強く反映する教科であるといえる〔斉藤、上條2002：70〕」。本研究の独自性は以下の2点である。①下位校の社会科教科書（中学1年前期）のシラバスとテキストを事例としている。アクティブ・ラーニングの教育方針のもとに身近な日常生活で遭遇しうる事例を多く扱い、シンガポールの教育理念が上位校の教科書よりもさらに明快に反映されていると考える。②検証の際には教科書の英語の語彙や表現についても注目し、政府の多文化教育方針を読み解く。

現在、多くの多民族・多文化国家・地域で多文化主義に基づく教育が実施されている。そして各国の国策・地域社会事情によって、多文化主義の意味合いには多様性がある。たとえば、米国の場合は大学入試などにみる「アファーマティブ・アクション Affirmative Action」など米国国民間のマイノリティ差別・格差の是正に主眼を置いている。日本の場合は「多文化共生 multicultural living-together [Ho、2017：92]」と銘打ち、異なる文化的背景を持つ人々の平和的共存と社会調和を強調している。だが日本の教育文化における多文化教育が外国籍の生徒を日本文化に同化し、適応させる役割を果たしている、という点で賛否両論を引き起こしている、ともいう [Ho：2017：92]。

これらに対してシンガポールの多文化教育は正確にいうと、「(民族文化の) 多様性の調和 Harmony in Diversity」を目指す生涯教育としての国民教育である。また、多くの国で多文化教育はシティズンシップ教育と連動して実施されている。グローバル・シティズンシップ重視の教育とナショナル・シティズンシップ重視の教育があるが、吉田 [2010] が指摘するように、シンガポールの場合

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学社会学部

は後者のほうに重点を置いている。それは都市国家という社会の性質から人口移動が流動的であること、また歴史的に人工的な多民族国家であることが大きな要因であると考えられる。そもそもシンガポールが多民族国家として独立したのは自発的な国民の意思というよりも、国際情勢の外圧によるところが大きい。しかも、植民地時代の都市計画によるセグレグレーションという形で共存していた多民族を CMIO 政策⁽¹⁾により HDB 住宅⁽²⁾で共生（共同生活）させようというのが、独立以来のシンガポールの国家統合政策である。植民地時代の分割統治を踏襲しながら共同住宅で生活させるという矛盾がむしろ民族間に摩擦を高めてしまい、混住推進と摩擦解消を同時進行させることとなった。

本論ではシンガポールの多文化政策の特徴として2点をあげる。すなわち第1に、CMIO 政策と英語中心の2言語教育政策⁽³⁾を基盤とした国民統合策の一環として実施されている点である。ゆえに、シンガポールの学校教育における多文化教育は、国民にとって卒業後も生涯続く多文化政策「学習」の基礎となる教育と考えられている。第2に、この国民教育の特徴としては実用主義 pragmatism に基づいた現状適応型の実践教育である点である。

本論の調査方法としては、シンガポールでの政府機関のイベントや展示などを現地で観察し、教科書とシラバスの一次資料を分析した。事例研究としてシンガポールの中等教育の現場で、特に多文化共生を教える実践的アクティブ・ラーニングに使用している教科書を事例に取り上げる。

本論の構成としては、I. ではシンガポールの多民族社会の現状と学校教育の特徴について説明する。II では中等学校社会科 Social Studies のシラバス概要を考察した上で、シラバスに書かれている教育理念・目標が具体的にどのように反映されているかを、中学1年春学期社会科必修科目「多文化社会に生きる Living in a multi-cultural society」のテキストの構成・内容から析出する [Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore 2014 a.]。III では、さらに社会人に向けた政府の多文化教育とニューカマーの問題についても言及しながら、シンガポールの国民統合に向けた国民教育の一環としての多文化教育について論じ、全体の議論をまとめる。

I. 背景

1. シンガポール多民族社会の特徴

シンガポールの国土は約 720 km²であり、東京 23 区とほぼ同じ面積に 564 万人（うちシンガポール人と永住者は 399 万人）が居住している（2019 年 1 月）。多民族国家シンガポールの国民内訳（2019）は、華人系 76%、マレー系 15%、インド系 7.5%、その他 1.5%（ユーラシアン等）となっている⁽⁴⁾。

シンガポールは特殊な国家成立過程を辿っている。マラッカ海峡の交通の要地であったシンガポールは最新の考古学の発掘調査結果によると 15 世紀くらいから東西交易の要地としての機能を開始したようである。だが、貿易港として急速に発展するのは、1819 年当時はテマセク（Temasek 海の街）と呼ばれたこの島にジョホール王国から英国が商館建設の許可を得、1824 年に植民地化してからであった。その後、1942～1945 年の日本軍占領、英国の直轄植民地としての復帰を経て、1963 年

にマレーシアの一部として英国から独立、その後1965年にマレーシアから分離独立、と常に島外の国際事情によって国家形態が変形されてきたのである。期せずして多民族都市国家として船出したシンガポールにとっては国民（民族）統合が最優先課題となった。シンガポールはマラヤ連邦時代から散発的に民族間の小競り合いや暴動が発生していた。頻繁に言及されるのは1950年マリア・ヘルトフ Maria Hertogh 事件と1965年の独立直前に発生した1964年モハメッド生誕祭の暴動である。1950年の事件の発端は、当時13歳だった少女マリア・ヘルトフの親権を巡り、ムスリムのマレー人養父母と生物学的母であるキリスト教徒のオランダ人との間で争われた裁判であったが、これが民族・宗教間の対立を生み、18名が死亡、173名が負傷する暴動に発展し、2週間も戒厳令が発令される事態となった〔Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore 2014 c : 30〕。1964年の暴動は総選挙直後にモハメッド生誕祭を祝うパレードが華人系の住居地域にさしかかった時、反マレー、反ムスリムの暴徒が殴り掛かり暴動に発展したものである。23名が死亡、454名が負傷した〔Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore 2014 a : 53〕。この2つの暴動が独立後の国民統合政策に及ぼした影響は大きく、多文化調和の構築・維持を目標に具体的な実施政策としてHDB住宅政策、国民教育政策等が導入された。

2. シンガポールの国民教育

1997年、リー・シェンロン首相のもとで国民教育が開始された。国民教育は国民統合と、学校の生徒たちと若年層に国民としてのアイデンティティを浸透（instil）させることを目的としている。シンガポールが受けている恩恵（benefits）と国内外で直面するチャレンジ（challenge）を理解するよう教え込む（inculcate to understand）。また、メリトクラシー、多文化・多宗教の調和という核となる価値観を強調している。国民教育は単体の教科として学校で教えられるものではないが特に初等教育では教育全般に注入された（infused）教育方針である⁶⁾。小学校では国旗掲揚、国旗への誓い、国定史跡の訪問などで、このような価値観を醸成する。国民教育では国民にとって大事な年間イベントを重視している。

①全国民防衛の日 Total Defense Day（2月15日）

1942年2月15日は日本軍によるシンガポール陥落の日である。国土防衛と愛国心喚起が目的のイベントが開催される。

②国際友好の日 International Friendship Day（第2学期の第3金曜日）

近隣諸国との友好と異文化への理解を深める。

③種族調和の日 Racial Harmony Day（7月21日）

1964年7月21日は暴動発生の日である。国民の分裂は国力を削ぐことを再認識し、種族（民族）・宗教の調和を讃える（celebrate）日である。

④ナショナル・デー National Day（8月9日）

1965年8月9日はシンガポールがマラヤ連邦から分離独立した日である。

いずれの日も各種関連イベントが開催され、国民の結束を喚起する内容となっている。本論の多文

化教育に直接関係があるのは②「種族調和」についてである。シンガポールにおいては特定の宗教を優遇することはしないが、いずれの宗教も尊重されるべきであり、特定の宗教に対する批判を禁じている。また、学校においても政教分離を実施している。フランスほど厳格ではなく、たとえば生徒はトゥドゥン tudung（ムスリム女性が被る髪を覆う布）の着用は不許可だが、教員は許可される。むしろ教員の宗教的シンボル着用が生徒たちに宗教的多様性を可視的に教授する効果があると考えられている。

3. シンガポールの学校教育

シンガポールの識字率は90%を超え、2018年にはPISA世界第2位、と世界で最も学力の高い国の一つとなっている⁶⁾。それはひとえに、都市国家で国土や天然資源など物質的資源の乏しいシンガポールが国民こそが資源とし、教育に注力してきた成果である。シンガポール社会における多文化教育について論じる際に重要な姿勢として以下の3点があげられる。

- ・英語中心の2言語教育政策：英語は国民間のコミュニケーションのための共通語・仕事の言語として、「母語」は各人のアイデンティティの礎を築くために学習させる。
- ・メリトクラシー：シンガポールでは人的資源を有効に使うため、民族・文化・信条・宗教を問わず、実力主義の学校教育を実施している。
- ・プラグマティズム：シンガポールの国策は独立当時から一貫して、ひとつの理想像を追うよりも、その時代・現状に適応した政策を実施してきた。これは教育にも当てはまり、実用教育がシンガポール教育の大きな特徴である。従って、国民統合政策としての多文化調和政策は単に基本的人権の尊重、民族間の平等を理念として掲げるだけではなく、現実の生活の中で共存のノウハウを生徒に考えさせる。また、近年では生徒の創造性を育てることの重要性も唱えられるようになった。チャンによれば「ポスト工業化時代の教育は、広い意味でのプラグマティックな方向性と創造力とのコンビネーションが基礎となって実現化されるのである [Chang 2002: 148].」

独立以来、リー・クアンユー Lee Kuan Yew 初代首相は自身を「シンガポール学校の校長」と自他ともに認め、「シンガポールの資源は国民の他は何もない」と教育に尽力した。1997年ゴー・チョクトン Goh Chok Tong 首相（当時）は「思考する学校、学習する国民 Thinking School, Learning Nation」という標語を掲げ、学習は一生続くこと、そして学校では日常生活に役立つ教育（実用教育）を実施することが大きな目的とした。教育の最終目的は、国家に貢献する人的資源を育成することゆえ、その目的達成のために教育課程は2極化しているのが大きな特徴である。すなわち、国家のリーダーとなるエリート教育と、国家を支える質の高い労働者を育成する教育との両方に力を入れている。2005年にはリー・シェンロン首相就任演説（2004）を起源として「教え過ぎず、学ぶを促す Teach Less, Think More」が提起された [吉田 2010: 42]。

意外なのは、シンガポールが教育制度を統一したのは1980年であり、義務教育制度が導入されたのは2003年になってからである。だが実際には導入以前から初等学校の授業料は無償であった。公立校の他に政府補助金を受給している半官半民の学校はあるが、完全な私学校はほとんど存在せず、

したがって国民は全て政府の方針に従った教育理念のもとに教育を受ける。現在は、初等教育6年、中等4～5年、高等2～3年となっている。生徒たちにとっては、エリート教育の過程か、非エリートの過程か、どちらの課程（ストリーム）に進むのか、は重要な問題である。その最初の関門となるのが、初等教育卒業試験である。この試験結果によって高速コース、標準（学術）コース、標準（技術）コースの各ストリームに振り分けられることとなる⁷⁾。本論では事例として、このうち標準（技術）コース用社会科教科書“*All About SOCIAL STUDIES*”のシリーズから、第1巻「多文化社会に生きる *Living in a Multicultural Society*」を取り上げる。

シンガポールの多文化教育に関する先行研究にはまず、教育学からのアプローチがある。特に日本における研究では、シンガポールの教育の先進的な分野である英語早期教育やICT教育についての関心が高い。シンガポールの最難関進学校のケーススタディやITを使用した最先端の教育例としての研究が多い。また、小学校の教科書については齊藤・上條 [2004] や酒井 [2014]、そして吉田 [2010] が地理におけるシティズンシップ教育について論じている。

多文化主義に焦点を当てた研究としてはホー Ho [2017] の一連の研究、マシューズ Mathews [2019] などの政策論からの研究がある。リアンとラジャ Lian and Rajah [2002 : 240–241] では政府のCMIO類型に基づく国民統合政策に批判的に論じている。モハマド・マリキ Mohamad Maliki [2015 : 189] は、ゴトン・ロヨン (Gotong Royong、相互扶助) とカンボン精神 (Kampong Spirit、村の精神) といった共同体の伝統を思い出すべきだという。ナショナル・シティズンシップは、これらの精神に基づいたマイクロ・コミュニティづくりから始まる、としている。

今後の多文化教育に関しては、たとえばマシューズとモハメド・カムシャ Mathews and Mohamed Khamsya [2015 : 91–92] は、より多くの市民が熱心に（社会の）多様性を理解し、その有難さを認識する (appreciate) よう、関心を育成する努力が必要としている。その暁には、多文化的生活は単に耐え忍ぶものではなく、「日常生活の喜び (pleasurable part of everyday life)」となる。そうすれば我々は「多文化のニルヴァーナ (multicultural nirvana)」に近づくのではないかとシンガポールのために希望する、としている。ここでは、おそらく英語圏では慣習的には“multicultural heaven”とキリスト教用語を使用するであろう比喩を、インド系の筆者があえて“nirvana”というヒンドゥー教的表現を用いている点にも注目する。英国文化を背景に発達した英語がシンガポール多文化社会に移植された結果、独自に発展を遂げている一例として指摘しておきたい。

さて、多くの教科書分析研究はシラバス分析が中心となる傾向があるが、本論では教科書のテキストにシラバスがどのように反映されているか、についても具体的に検証する。本論ではあえて中学1年生、特に標準（技術）コースの教科書 *All about SOCIAL STUDIES* シリーズを取り上げた⁸⁾。下位校を取り上げた理由として次の2点をあげる。第1に、これはシンガポールの中等学校教科書全般に言えることだが、自主性を涵養するためにアクティブ・ラーニングの方針を導入していること。第2に、特に下位校には中等教育直後に社会人となる生徒や職業訓練学校に行く生徒が多いため、上位校のコース⁹⁾に比べると、より生活に密着した具体的な社会問題を扱っており、卒業後も日常的に役立

つ実践的な学び、また、政府が生徒たちに学ばせたい教育内容をよりわかりやすい英文で構成されている。シム [2009] は、シンガポールではエリートへの教育のみでなく、下位校にこそ手厚い教育を実施しているという。非エリートたちに対しても「貴重な人的資源として頭脳の最後の一滴まで絞り切る [シム 2009: 3]」ために、彼らの学びへの動機づけを高めるべく、教授法やテキストの構成・レイアウトなどにも丁寧な作り込みが見られる。多くの多文化社会において異民族間の摩擦は労働者階層の間で多発する傾向がある。そこで、将来は労働者階層を形成する可能性が大きい下位校の生徒たちにこそ、丁寧に多文化教育を施す必要がある、という考え方である。

シンガポールでは小学1年生から語学授業を除く全ての学習科目は英語を教授媒体としているため、中学1年生のときにはすでに6年間の英語での授業経験がある。本論で取り上げる教科書は、シンガポールでは下位校の生徒対象の教科書なのでわかりやすい英語で書かれているが、それでも中1のリーディング・レベルは日本の公立高校1・2年生位に匹敵する語彙と内容がある。上位校対象の3・4年生の教科書は日本の大学生の英語授業でも使用できよう。また、現在日本の高校や大学で、アクティブ・ラーニングが推進されているが、その教科書作りにも参考になりうる。

Ⅱ. 社会科教科書のシラバスとテキストの分析

1. 中等学校社会科全学年教科書シラバスについて

中学社会科の4年間の教科書 All about SOCIAL STUDIES シリーズの作成目的としては、生徒たちがシンガポールの抱える重要な諸問題について深く学習することを奨励することである。小学校6年間のシティズンシップ教育と合わせ、小・中等学校の10年間でシンガポール国民としての共通のアイデンティティと社会意識を育成するカリキュラムになっている。全6巻で構成され、各巻は現代シンガポール社会の特徴とそれに付随する問題を、1巻ごとに特集している。すなわち、「多文化社会に生きる Living in a Multicultural Society」、「移民への対応 Responding to Migration」、「対立の解決と平和の構築 Resolving Conflict and Building Peace」、「私たちの環境の保全 Protecting Our Environment」、「私たちの金融資源の運営 Managing Our Financial Resources」、そして「社会への思いやり Caring for Society」である。

そして本論で事例研究に取り上げる「多文化に生きる」が、第1巻として中学初年度最初の学期の教科書である点に注目したい。つまり、多民族国家シンガポールの最重要課題は国民統合のための多文化共生社会の構築であり、中卒の生徒の多くは将来、労働者としてニューカマーたちとも最も頻繁に接触する可能性が高い職場に就労することになる。その心構えを中学1年生の早期から育成することが狙いであり、特にメッセージ性の強い内容となっている。

・社会教育の哲学として：

- ①社会科カリキュラムの核心は、生徒を未来の市民（国民）として育成することにある。
- ②社会科は生徒たちの日常生活に関わる実社会の問題について、なぜだろうと好奇心を持つよう興味を喚起することを探求する。

・カリキュラムの目標：

生徒たちは知識豊富で、社会に興味を持ち、積極的に社会参加をする市民となることを期待される。

・以上の哲学と目標を達成するためにはどのような教科書の内容を構成するか：

6つのテーマ別アプローチ（issue-based approach）を4年間で学ぶように構成されている。

社会科学の思考方法を教えながら、歴史、地理、政治、社会学、経済学の知識を盛り込んでいる。

[Social Studies Syllabus Secondary One to Four Normal (Technical) Course,

<https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/humanities/files/social-studies-normal-technical-2014.pdf>, p. 2-3]

表1 標準（技術）コースの社会科教科書全学年のテーマと扱う問題

レベル	学年	テーマ	問題点
中学低学年 (lower secondary)	1	多文化社会に生きる Living in a Multicultural Society	多文化社会において調和は実現可能か？
		移民への対応 Responding to Migration	移民は歓迎されているのか？
	2	対立の解決と平和の構築 Resolving Conflict and Building Peace	平和は実現可能か？
		私たちの環境の保全 Protecting Our Environment	環境は保護するのにふさわしいか？
中学高学年 (upper secondary)	3	私たちの金融資源の運営 Managing Our Financial Resources	私たちの金融資源の適切な活用とは？
	4	社会への思いやり Caring for Society	どうしたらシンガポールを社会的弱者の人々にとってよりよい場所にできるか。

(<https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/humanities/files/social-studies-normal-technical-2014.pdf>をもとに筆者作成。)

このシリーズの教科書にはアクティブ・ラーニングの手法が取り入れられており、学生たちが自主的にかつ他の生徒たちと協力しながら学ぶための豊富なアクティビティ（グループワークやフィールドワークなど）が盛り込まれ、楽しく社会科を学べるように、そして同時に、生徒たちが創造的でクリティカルな考える技術を養えるように構成に工夫が凝らされている。豊富な写真やイラストが掲載され、また説明文は少なく、内容は漫画の対話形式で説明される。また、動画教材も使用し視聴覚に訴えながら、自分の考えをまとめ、他の生徒とディスカッションするように各章末にドリルがついている。

2. 事例研究：社会科教科書中学1年前期「多文化社会に生きる」のシラバスとテキスト分析

この教科書は中学1年生前期用であり、このシリーズの巻頭を飾る1冊である。本書のテーマは、生徒たちがアクティビティを分かち合うことで調和の取れた社会の一員としての自覚を育成すること

である。「(社会的) 調和は経験を共有することによって形成されるものである」とのメッセージを強く打ち出している。政府はHDB住宅に国民を住まわすなど、異なる民族・宗教の人々を混住させようとしているが、異なる言語、食文化、宗教儀礼などが原因で近所トラブルも生じている。それらに対して具体的な解決法を学校教育で教え、異なるエスニック集団間・宗教間の摩擦を回避し、協力的な共同体を形成する姿勢を学ばせるのが、この教科書の中心課題である。

2-1. シラバス分析

以下に、 教員用のシラバスを表にまとめた。

表2 中学1年社会科前期“Living in a Multicultural Society”の教員用シラバス

なぜこのテーマが重要なのか		
「多文化社会を生きる」のテーマを勉強することにより、生徒達に文化の多様性の有難さを認識させ (appreciate)、調和の重要性を理解させる。このテーマを掘り下げることで、生徒達は自分が個人として、また集団の構成員としてどのような存在か、の理解を深める。生徒達が多文化社会における共通の営みや価値観と同様に、如何にしたら多様性も受け入れ、尊重し、讃える (celebrate) ようになるか。このテーマを勉強することにより、生徒達に調和を維持し、促進している必要性の意識を高め、多文化社会における調和を達成するために各生徒の責任感を育む。		
焦点となる問い		
多文化社会における調和は達成可能か。		
カギとなる概念		
・アイデンティティ ・多文化主義 ・多様性 ・調和		
カギとなる理解		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 私たちの文化と経験は私たちのアイデンティティを形成する【1】。 ・ 「調和を生きる」とは私たちの相違を理解し、尊敬すること、共有するものの有難さを認識する (appreciate) ことである【2,3】。 ・ 調和は、私たちが同じ場と経験を共有することで鑄造 (forged) される【4】。 		
生徒達が達成できる成果	知識の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ アイデンティティはその人の文化的背景によって形成されることを説明できる【1-1】。 ・ シンガポールにおける共通の文化的行事について複数の事例を説明できる【1-2】。 ・ シンガポール多民族社会に生きるチャレンジと恩恵について、複数の事例を説明できる【2】。 ・ シンガポール多民族社会における文化理解と異文化間の調和を促進する方法を共有できる【3,4】。
	技能の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報を収集し、構成することができる。 ・ 資料を分析し、データを解析できる。 ・ 複数の異なる見解や代替案を考慮し、情報を理解した上で判断を下せる。 ・ 明快で創造的な様々なプレゼンの技術や方法で意見や発見について意見交換できる。
	価値観の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 異なる文化的背景を持つ人々の様々な考え方を尊重できる。 ・ 多様な文化と多文化社会における調和を受容し、有難く思える (appreciate)。 ・ 他の人々と調和を持って生活し、働くことができる。

【 】内は対応するテキストの章・節の番号。

(<https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/humanities/files/social-studies-normal-technical-2014.pdf>, p. 8 とテキストの目次を筆者が和訳、再構成)

次にこのシラバスの特徴を析出する。第1に、授業の目的が大変明瞭な点である。第2に、できるだけ生徒たちの日常生活で遭遇するような場面や事件などを事例に取り上げ、考察させる点にシンガポールのプラグマティズムが見られる。たとえば、第1章で食文化や祭礼という、身近な状況を最初の事例として挙げているのは多文化主義について生徒たちが考える際のハードルを低くし、問題意識を持ちやすくしている。第3の特徴としては、英語の言葉遣い（特に動詞の選択）に国民教育らしさが顕著に表現されている。筆者が気づいた3点は次のとおりである。①たとえば“our nation”, “our neighbour”, “our common space” というように所有格に“our”を多用し、国民としての共同体意識を高める。②“instil”, “inculcate to understand” というような動詞が使用されており、これらの動詞の選択に、教員が主体となって生徒たちに政府の教育理念を「浸透させる」、「教え込む」という意気込みが表現されている。③多文化社会をポジティブに捉えている。たとえば、“appreciate（有難く思う、感謝する、真価を認め尊重する、高く評価するなど）”, “celebrate（祝う、讃える）” という動詞が多用され、シンガポールが多文化社会であることがどれほど恵まれた環境であるか、を生徒たちに教え、その素晴らしい環境を維持しよう、と呼び掛けている。先にあげた Mathews and Mohamad Kham-sya [2015] のように、シンガポールの研究者の論文を読んでも、多文化主義へのポジティブな定義が見られる。標語に“Harmony in Diversity”と“harmony”という名詞を使用していることに国民統合へのポジティブ・イメージを醸成しようとする姿勢が顕著に提示されている。

また、通常は多文化社会の影の部分、あるいは社会問題と考えられる異民族間の対立については“challenge（挑みがいがある、やりがいのある課題・仕事）”として表現されている。つまり、そこには異民族間の対立は克服が不可能ではない、という希望的な含意がある。また、1年前期では日常生活における摩擦を取り上げているが、1年後期では新移民との摩擦、そして2年前期ではさらに深刻な民族対立や異民族による国土の侵略・占領、そして国防の大切さへと問題意識を広げていく構成となっている [Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore 2014 a, 2014 b, 2014 c]。

2-2. テキスト分析—「多文化社会を生きる」より「第2章 シンガポールの文化的多様性の有難さを認識する」を事例に

最初にテキスト「多文化社会を生きる」の目次と指導的質問を表3にまとめた。

表3の中から、「第2章シンガポールの文化的多様性の有難さを認識する（appreciate）」を事例に章の構成と内容を分析する。

表3 生徒用テキストの目次(習得する知識と理解)と指導的質問

目次のタイトルと指導的質問 (guiding question)	目次(「」内は理解へのカギとなる文章 Key Understanding)
1. 私のアイデンティティと文化 My Identity and Culture 1-1. アイデンティティ ・何が私たちを私たちたらしめているのか。 ・私の文化とは何か。 1-2. 文化 ・私の文化集団の成員と共有する経験は何か。	「私たちの文化と経験は私たちのアイデンティティを形成する。」 ・アイデンティティ：私たちは何者か、そしていかに私たちのアイデンティティは私たちの文化・経験から形成されているのかを理解する。 「調和的に生活するとは、私たちの違いを尊重し、共通点を有難く思う (appreciate) こと。」 ・シンガポールの主要な民族・宗教集団の文化行事 ・多様な文化行事が存在する有難さ (appreciation) を認識させる。 事例：挨拶の仕方、誕生に関する儀礼、主要な祭りの祝い方
2. シンガポールの文化的多様性の有難さを認識する (appreciate)。 Appreciating Cultural Diversity in Singapore 2-1. シンガポールの文化的多様性がもたらす恩恵は何か。 2. 2. 多文化社会に生きるチャレンジは何か。 ・そのチャレンジにどのように対応できるか。	・シンガポールの文化的多様性の恩恵 (benefits) ・多様な文化的背景を持つ友人たち ・多様な文化的祝祭 ・多様な料理 ・多文化社会に生きるチャレンジ (challenges) ・誤解、偏見、誤認 事例：異文化集団間の過去の例 (1964年の暴動) と現在の係争。
3. 私たちの近所のコモン・スペースの共有 Sharing Common Spaces in Our Neighbourhood	「調和は、私たちの(住む)空間と経験の共有によって促進することができる。」(←第4章も同様) ・私たちの近所のコモン・スペースの共有 事例：HDB(公団)住宅 ・人々が交流する場 事例：フード・センター、コミュニティ・センター、運動場、フィットネス・センター
4. 同じ経験の共有 Sharing Common Experiences ・私たちがどうしたらシンガポールで調和的 (harmoniously) に生活することができるか。	・共通の行事と経験の共有 ・経験の共有としての学校での学習自治会のプログラムと活動における共通経験の共有 ・軍事訓練を通じた共通経験の共有

(<https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/humanities/files/social-studies-normal-technical-2014.pdf>, p. 8 とテキストの目次を筆者が和訳、再構成)

【第2章の構成】

- ・ Chapter Trigger (生徒たちのアクティビティの課題。以下、Act.と略す)：当該章の学びを始める前に、生徒たちの知っている知識を整理する。
- ・ Key Understanding：当該章の学びの目的を簡潔な1文で提示されている。
(この内容が政府の教育政策を反映しているのでわかりやすい)
- ・ LEARN：この章で何を学ぶのかを理解し、整理する。
- ・ ASK：この章で学ぶ内容に関する質問が提示されている。
- ・ Watch and Discuss (Act.)：関連のビデオやアニメを見て、グループで感想を交換する。
- ・ Explore (Act.)：街にでてフィールド調査を試みる(街の観察やインタビューなど)。
- ・ Preference task (Act.)：クラスメートと調査結果を交換する。

- ・ Glossary：この単元で新しく学ぶ単語、その定義・概念を説明した辞書。
- ・ Did you know：さらに深い学びのための一口コラム
- ・ Grow my thoughts (Act.)：短い課題（7～10行くらい）
- ・ My thoughts (小論文) (Act.)：この章で学んだことをもとに自分の考え、経験、感情などをまとめる。
- ・ Summary：対話形式の漫画でこの単元の内容をまとめてある。ただし、吹き出しの量が多く、冒頭にでてきた Key Understanding がここで再録され、下線部が引いてある。

以上、生徒の個人またはクラスメートと教室内外で実施するアクティビティに多くの紙面と活動時間をとっていることが大きな特徴である。シンガポールの学校は実学教育に重点を置いており、教科書の内容をただ暗記するだけでなく、教科書が伝えたい教育内容を生徒が自分で考えることによって理解し、体得するのが目的であることがよくわかるテキスト構成である。

【第2章の内容】

- ・ Key Understanding : Living harmoniously means understanding and respecting our differences, and appreciating what we share in common.
(調和を持って生きることとは、私たちの相違を理解し、かつ尊敬することであり、私たちが共有するものの有り難さを認識することである。)
- ・ Learn (身につくスキル)：①資料・統計の扱い方②複眼的視点・オルターナティブの考え方③情報のまとめ方。
- ・ Ask (考えるテーマ)：①シンガポール多文化社会に生きる恩恵とは何か②チャレンジとは何か。

【第2章第1節 シンガポール多文化社会の恩恵 (Benefits)】

最初に動画で25歳のマレー系シンガポール人の女性建築家のモノローグを見る。彼女は華人系の親友がいるので北京語を話し、大学ではバングラデシュ人の友人がいたのでバングラデシュで結婚式に出席できた。このような経験ができることが多文化社会の利点である、と結論している。Activity (以下、Act.) 1ではクラスメートに彼らのエスニック集団や出身国を尋ね、解答欄に書く。

Act. 2では毎月に開催される各宗教の祭礼について各自で調べ、祭礼の内容と祝う理由を書く。

Act. 3では各民族の食文化について。まず生徒たちに各民族の食文化を調べさせ、次にシンガポールを代表する料理をあげ、それらの料理は実は複数のエスニック料理が混淆して誕生したものである、と説明を加えている。それによって、シンガポールの複数の文化は単に共存しているのではなく、お互いに影響しあってシンガポールの国民文化を形成していることを理解させようとしている。たとえば、フィッシュヘッド・カレー Fish head curry、ミー・ゴレン Mee goreng (焼きそば)、ミー・ソト Mee soto (汁そば)、Satay サテー (焼き鳥) などについての説明と写真が資料として提示されている。宗教的タブーに配慮してメニューに豚肉や牛肉の料理は事例に挙げていない点に注目したい。

Act. 4ではこれらの料理を屋台などで材料や作り方の聞き取りをするフィールド調査が課せられている。そのために質的調査の方法やマナー、プライバシーなどへの倫理的配慮についても学習する。

Act. 5ではシンガポールを代表する一皿（シンガポール国民共通文化）を考えさせる。最後に“My thoughts”で、この節をまとめる作文課題がある。

【第2章第2節 多文化社会で生きるチャレンジ “Challenge”】

この節が本書の大きな特徴であり、ハイライトだといえよう。生徒に人種差別的な発言への対応を考えさせる。中学1年生の段階で、このように正面から差別を取り上げるのは教育の場では勇気がいることである。そこで使用する表現も慎重に選択されている。たとえば、「ヘイト・スピーチ」というような直接的な表現は使用せず、婉曲的に「心無い発言 insensitive remarks」と表現している。「あなたはそのような言葉（の暴力）を投げかけられたことはあるか」、「その時どう思ったか」を率直に分かち合う。多文化社会への“Challenge”への対応はどうしたらよいか。それには相手を理解し、自分を理解してもらうことが重要だとしている。

Act. 6で写真2枚（怪我人の写真と戒厳令の写真）を見せ、そこから何がわかるか考えさせる。Act. 7では、1964年の事件について漫画で概要を読む。その後、アニメを見て3つの質問に答える。アニメではこの事件の政治的な争点ではなく、事件が勃発した時に一般市民がどのような影響を受けたか、そしてアニメの主人公のマレー人の生徒がそれまで自分と他のクラスメートたちとのエスニック集団の違いなど考えたことがなかったのに、突然ヘイト・クライムの標的となってしまったことへの戸惑い、そしてその後、近所の人々（異民族）のおかげで日常生活に戻ることができた、という内容である。そのメッセージとしては、「日頃の隣人たちとの結びつきが大切である」ということである。

Act. 8では現代のシンガポール多民族社会について考える。まず短い新聞記事を読む。17歳の生徒2名がface bookとtwitterに、人種差別的発言 racist remarkの書き込みをして逮捕された、とある。そして以下の3つの質問に答えるようになっている。

1. 人種差別的な発言とは何か。
2. なぜ彼らは逮捕されたのか。
3. このような行為を取りしめる法律がなかったら（社会は）どうなると思うか。

より深い学びのために次の課題が提示される。

A. あなたの所属する文化集団に対して不適切な発言をされてことはあるか、考えてみよう。

1. そのような発言があった場合はその発言内容はどのようなものだったか。
2. それに対してあなたはどのように感じたか。
3. そのような発言に対してあなたはどのように対応したか。
4. 最終的にはどのような結果となったか。

以上、7問に対して自分で回答した後、クラスメート2名とこれらの内容を分かち合うディスカッションの時間とする。その後、互いの経験を共有して分かったことを発表する。その後、ディスカッショングループで、調和の保持のために必要な方法を2つ考えるように指示してこの単元を終える。

ちなみにその次のページのイラストでは、2つの回答例を挙げている。

1. 異なる文化的背景を持つ生徒と一緒にゲームをして遊ぶ。
2. クラスメートの自宅に招かれ、おやつ（その民族のお菓子）を楽しむ。

これらはいかにも、中学1年生が答えそうな回答である。ワークショップはここで終わらず、さらに思考を深めさせる。

Act. 9は「我々はこのようなチャレンジ（ヘイト・スピーチ）に（具体的に）どのように対応したらよいか」である。ここでは、4つのシチュエーションが用意されている。導入部には短い漫画のコマが使われており、事例として使用されている状況や会話の主体には各民族への配慮が見られる。

1. 会話の主体：インド系の生徒。

中間試験後のクラス会を開催したいけど、クラスメートに食事制限（タブー）はあるかな？（マレー系他、ムスリムの生徒のタブーについて考える。）

2. 会話の主体：華人系の生徒とマレー系の生徒。

クラスメートみんなで遠足に行ったのに、インド系の二人がずっとタミル語で話している。私たちは何を言っているのかわからない。二人にどう助言したらよいか。

3. 会話の主体：マレー系：hungry ghost festival で、近所の華人系の家が紙のお札を燃やしている。灰が家に入って困る。この状況をあなたの兄弟になんと説明したらよいか。

4. 会話の主体：華人系：近所のマレー人が結婚式後の披露宴で夜遅くまで騒いでいる。

あなたの小さな弟が眠れない、と泣いている。弟になんと説明したらよいか。

「私の考え My Thoughts」として、この章のまとめとして、以下の3つの質問に5行程度で答える。

1. 多民族社会の利点は何でしょう。
2. 2つのチャレンジへの対応
3. 多民族共生を促進するために私が提案できることはなにか。

「まとめ Summary」として、最後にこの単元での学びの目的を復習している。すなわち、異なる文化的背景を持つ人々が対立を回避し、調和を持ってともに暮らすには、お互いの文化をよく知り、理解すること、そして異なる文化を尊重する姿勢の重要性を互いの体験を分かち合うことで学ばせている。

【(第2章の) まとめ】

インダ先生（トゥドウンを着用したマレー人女性）：ジョシュア、週末は休めたの？眠そうですね、大丈夫？

ジョシュア（ユーラシアン男子生徒）：ありがとうございます。大丈夫です。昨夜は従弟が止まりに来て面倒を見なくてはいけなくて。彼は手が焼けるんです。昼寝をさせようとしたら、大きな音で目が覚めてしまったんです。近所のマレー人の人々が結婚式のお祝いをしていました。

I: そうね、特に音楽は音が大きいわね。まあ、それはお祝いだし、音楽は楽しい雰囲気を醸し出すわ。

- J: わかります。とても楽しそうでした。お客さんがたくさんで、すごいご馳走だったなあ!
- I: それはそうですね。結婚式はただ家族のためだけではなく、花嫁と花婿の共同体のためでもあるのです。マレー文化は家族や親族だけでなく、共同体と共有することを重視しています。だから、もてなす側は全ての人々においしい料理が行き渡るように気を配り、みんなが交流して楽しめるのです。
- J: なるほど、だからご馳走と音楽が大事なのですね。私の家族で馴染んでいるやり方とは違うけど、このような意味深い行事はとても良いと思います (appreciate)。
- I: シンガポールという多文化社会は、文化的多様性と調和の重要性を有難く思う (appreciate) 機会を与えてくれますね。
- J: 私たちの相違を理解し、尊重すること、そして私たちが共有するものの有り難さを認識することで、私たちは調和を持って生きていけるのですね。Understanding and respecting our differences, and appreciating what we share in common, enable us to live harmoniously. (調和を持って生きることとは、私たちの違いを理解し、かつ尊敬することであり、私たちが共有することの良さを理解することである。筆者注: ここで冒頭の key understanding の文章を再録している。) [Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore 2014 a: 64-65] を筆者和訳。

教科書の最後の見開きページには、総まとめとして各章に関して10行ほどの小論文を書きこませるようになっており、書き終わると本書の学びの要点が見渡せるように構成されている。

以上、この章では、エスニック集団が異文化集団の単位として取り上げられているが、別の単位では出身小学校の違いを単位として取り上げている。自分の文化的属性を絶対的・普遍的な基準とせず、客観的にみる視点、柔軟に異文化に対応する視点の育成に注力している。そのためにイラスト、写真、動画、漫画などを使用して、楽しく視覚に訴える多色刷りのテキストとなっている。また、教員と生徒や生徒同士の対話のイラストや漫画が多用されているが、CMIOのバランスに配慮して描いている。

また、本論では最終章4章の詳細は割愛したが、4章の最後のまとめの漫画は、華人系のおじいさんと孫娘の会話である。「おじいさんはどうしてお友達と中国語で話しているの?」という質問から、多民族社会では英語という中立言語を使用する重要性を説く。最後に少女が、「私も50年たってもおじいさんたちみたいに、(多民族から成る) クラスメートたちとお友達でいたいわ。」というセリフで締めくくっている。この漫画だけは会話をしている二人が両方とも同じエスニック集団出身者であることは、やはり意図的であろう。すなわち、同じエスニック集団間での世代を超えた「多様性の調和」への姿勢を継承していくこと、未来への国家の持続的発展を示唆しているといえよう。

このシラバスとテキストを検証した結果、以下の2点を析出した。

第1に、通常、中学1年生には理解が難しいと思われる多文化共生をテーマとした教科書作成にあたり、具体的で身近な事柄、社会現象から問題意識を喚起し、かつ各民族に対して隅々まで細やかに神経を使って編集していることがわかる。しかもシンガポールの中学生1年生(小学校を卒業したば

かり)の英語力で理解しやすいシンプルな英語を使用し、彼らの社会認知力のレベルで理解できる内容でありながら、多文化社会が抱える重要な問題点を扱っている。

第2に、フィールド調査を通じて、事実と分析を明確に分けて考えることを学習させ、その分析の過程で政府が推進する多文化教育を指導している。シンガポールでは、HDBなどでは政府が意識的に異なる民族を共住させようと入居条件にクォータ性を導入しているが、それでも最近では地域によっては特定のエスニック集団や職種の家族がまとまって居住している地域もある。民族問題は極めてセンシティブな問題であることから、教員が社会事情を事前に熟知していることが重要である。「教えずに、学びを促す」といいつつも、むしろ教員側の授業準備にはかなりの労力が必要となろう。

Ⅲ. 生涯教育としての多文化教育と新しい課題としてのニューカマーの急増

シンガポールの多文化教育は生涯教育である。学校卒業後も社会人対象に続く。特に、華人系が70%以上を占めるシンガポールにおいて、宗教とライフスタイルが密接に関わるムスリム社会との共存は重要な問題である。たとえば、2016年8月に内務省(Ministry of National Development)は「『多様性の調和』ギャラリー Harmony in Diversity Gallery」を省内に開設した。このギャラリーでは特に多宗教の共存をアピールしている。

表4 『多様性の調和』ギャラリー Harmony in Diversity Gallery」の構成

1. 信仰の旅 Journey of Faith	シンガポールにおける宗教の多様性を解説し、独立以降の宗教摩擦についてもその原因を探り、調和・共存への道を探る。マリア・ヘルツ事件は新聞記事を掲載し、両当事者それぞれの言い分を証言させる動画の再現劇で両者の立場を理解する。
2. 共通項を探して Seeking what is common	一見異なる表象文化を持つ諸宗教集団の教義、儀礼、シンボルの共通性に焦点を当てる並行展示により宗教形態の類似性を強調し、諸宗教がいかに共通目的であるシンガポール国家建設に貢献したかを、歴史を辿って展示している。
3. 多様な信仰、一つの国民 Many Faiths, One people	ホーカー(屋台)のフードコートの手割の前にテーブルと椅子が置いてある。その椅子に座って写真を撮ると、様々なエスニック・フードの店で食事をしている多民族の人々と共あたたかも共に食卓を囲んでいるようなトリック・アートが出来上がる。これにより異民族どうしが場を共有する重要性を体験させる仕掛けとなっている。
4. 私たちシンガポール国民 We, the People of Singapore	宗教文化の異なる隣人や友人とのトラブルをインターアクティブなゲーム形式で解決方法を考える。これは中学の教科書と同様に、日常に遭遇しそうな具体的な事例が上げられそれを解決させる。

(Harmony in Diversity Galleryの展示とパンフレットをもとに筆者作成。)

表4を見ると、政府の国民教育方針の一貫性が見て取れる。展示内容は中学の「多文化社会に生きる」と同様のテーマを扱っている。すなわち、対立を回避するための異文化対話の重要性、共通点を積極的に見出すこと、異民族(異なる信仰を持つ人々)が場を共有することである。ここでもアクティブ・ラーニングの手法が活用されている。違いは、中等学校の授業では生徒に回答を自主的に施

行させることを重視しているが、ここでは事前に具体的な選択肢と「正解」が用意されていることである。たとえば4のゲームの一つには以下のような問題が3つのパネルで提示してある。

事例：「いつも一緒にランチをする友人タリブ Talib 君が今月は断食しているという。そこであなたはなんとなく彼を避けるようになり、友情が危機に陥ってしまった。」(マレー系のタリブ君と「私(華人系青年)」の写真)

パネル1. あなたはどうしますか。(フードコートの写真)

- ①タリブ君をからかって彼の前で食べ物のお話をしたり、これみよがしに目の前で食事をしたりする。
- ②別のクラスメートとランチに行く。
- ③タリブ君に彼を避けてしまったことを謝り、なぜ今月は断食しなくてはいけないのかを聞き、日没後の食事を一緒にしたい、という。

パネル2. ③が正解。タリブ君は謝罪を受け入れ、「ラマダン」について説明して、あなたを日没後の食事に家に招待する。(タリブ君が笑顔で訪問者に正対し食事に招待する写真)

パネル3. ラマダンについての詳しい説明があり、その下に「友人たちが自分と異なる進行や宗教儀礼を実施するからと無視したり、排除したりするのではなく、自分から理解するように努めよう。」と書かれている。

異なる信仰を持つ人々と調和した社会生活を送るためには、コモン・スペース、共通の場に集うことの重要性をここでも説いている。すなわち、日常的に接点を持つことで、交流し、会話を通してお互いの宗教慣習に理解を深め、儀礼等の理由がわかれば歩み寄りをすることもできる。また、親しい友人となれば暴動も起きない、という考え方である。抽象的な理想を掲げるよりも、実践的なハウツーを学習させる、という実用主義的教育方針がここでも実践されている。2016年9月8日に筆者がギャラリーを訪問した際には、約20名のシンガポール陸軍の新兵も軍隊教育の一環として引率されてきていた。このような学習目的の団体、特に学生には学生用アクティビティブック **Student Activity Book** が配布され、展示物を見ながら、この手帳の空白を埋める作業を通して展示の意図を理解させる。

最後に、多文化社会の新たな課題としてニューカマーの急増についても言及しておきたい。シンガポールは独立後の経済発展において労働力不足を補充するために海外から労働者を受け入れてきた。21世紀になり、ニューカマー人口が急増する。本論で取り上げた社会科教科書のシリーズでは中学1年で前期に多文化社会、続く後期に「移民への対応」がテーマとして取り上げられていることからシンガポールにとってニューカマー問題が高い優先順位にあることがわかる。テキストの目次は第1章「人はなぜ移民するのか」、第2章「移民たちはどのような経験をしてきたのか」、第3章「移民たちの(シンガポール社会建設への)貢献とは」、第4章「私たちは移民にどのように対応したらよいか」となっている。すなわち、自分たちの先祖たちもまた移民であったこと、その移民だった先祖たちがシンガポールの国づくりに貢献してきた。従って、現代の新移民たちも将来のシンガポールの

国づくりに一緒に参加していく仲間なのだ、と三段論法で教えている。特に第4章では移民をどのように統合 integrate したらよいか、と論じている。ここで興味深いのは、元来移民国家であるシンガポールのはずが、移民は社会を活性化する、というメッセージをあえて強調している点である。背景には中国・インドなどからの新移民、あるいは米国人、日本人など外国人の駐在員の人口の増加のみでなく、10年前ごろからのニューカマーたちによる出身地別居住クラスターや職業別クラスターの多発に対する危機意識があると推察される⁽¹⁰⁾。結果、新移民は政府の計画的居住バランスを乱す要因ともなっている。

また、シンガポールでは英語の公用語使用奨励によって英語が最も使用されている言語となった。5歳以上の人々が家庭で話す言語として、39.9%が英語、34.9%が北京語を話すとしている⁽¹¹⁾。英語という共通言語の普及、異民族間の交流推進による国際結婚の増加、そして新移民や駐在員の増加によって、CMIO政策の分類のうち、「O (Others)」の人口も増加かつ多様化し、MCIO類型にあてはまらないダブル・バレル double-barrel の人口も増加している。また、ニューカマー増加に伴いシンガポール人側の外国人嫌い xenophobia の高まりも危惧されている。1964年の暴動以来、1965年に独立してからも44年間は大きな暴動はなかったが、2018年にリトル・インディアで外国人労働者が暴動をおこし、駆け付けた警察によって2時間ほどで鎮静された。このような社会変動が、独立以来のCMIO類型を基盤とした国民統合の整然とした統治形態を揺るがしている。今後はその類型を基盤とした多文化調和政策、ひいては国民統合政策は新たな社会発展段階にプラグマティックに対応することを迫られることになろう。また、40年近く継続しているストリーム制中等教育にも学歴偏重による差別が社会問題化しつつあり、社会変動に伴い教育制度も変更され、教科書も改定されていく可能性がある。すでに教育制度変更の兆しとして2024年からは現在のストリーム制を廃し、科目毎に共通試験を課す制度へと移行する計画が公開されている⁽¹²⁾。

以上、本論では、シンガポールの多文化調和教育が国民統合政策の一環として具体的に実施されている方法について、中学の教科書を中心に内務省の取り組みにも言及しつつ、詳らかに検証・分析した。教科書の英語語彙選択の傾向に国家の教育姿勢が強く反映されている点も指摘した。今後は、2024年の教育制度変更が多文化教育に及ぼす影響などについても興味深く注視していきたい。

*本論文は、科学研究費基礎研究(C)、研究課題「シンガポールの「英語化」にみる歴史観創造と伝統文化継承への影響に関する研究」(研究代表者：平島みさ(奥村みさ)平成29年度～32年度)の研究成果の一部である。

注

- (1) 多民族国家シンガポールは国民を華人系 (Chinese)、マレー系 (Malay)、インド系 (Indian)、その他 (Others) の“race”に4分類した国民統合政策を実施している。この政策を略して「CMIO政策」という。この分類は植民地統治自体の偉制であり、“race”はエスニック集団“ethnic group”と同義で使用される。本文に引用

しているシラバスやテキストの内容を見てもわかるとおり、シンガポールの場合“race”は文化的・宗教的特徴を論じる傾向にある。従って、“race”を和訳する場合は、一般的には生物学的特徴を基盤とした「人種」があてられるが、シンガポールの場合は学術的には「種族」、または「エスニック集団」と訳すことが適切と考える。シンガポールの国民統合は個々の市民の共同体ではなく、エスニック集団などの複数の集団の共同体を通じて政治的に構築されている [石井 2016: 82]。従って、多文化調和論も常に CMIO 分類がその基礎にある。

- (2) HDB とは「住宅開発庁 Housing and Development Board」の略である。シンガポールは 1959 年に自治権獲得後、住宅問題を解決すべく 1960 年から HDB による公団住宅開発が開始された。現在、シンガポールの国民の 85% が HDB 住宅（公団住宅）に居住している。シンガポール政府は共通の場で生活することが異民族間の理解を深めるとの方針のもと、CMIO の人口比に沿った割合（クォータ）で公団住宅への入居を奨励し、国民の共同体意識を高めようとしている。
- (3) シンガポールは 1965 年の独立直後、1966 年から英語を中心とした 2 言語教育政策を実施しており、国民は小学校に入学すると英語を教授媒体とし、「母語」として北京語、マレー語、タミル語のうち 1 言語を、自分の帰属するエスニック集団の「母文化」を継承するために選択、学習する。「その他」の人々は、原則的に第 2 言語は英語を選択することになっている [奥村、郭、江田 2006]。
- (4) CMIO の人口内訳、<https://www.gov.sg/article/what-are-the-racial-proportions-among-singapore-citizens>, 2020 年 9 月 28 日閲覧。
- (5) シンガポールの国民教育、<https://eresources.nlb.gov.sg/history/events/44fa0306-ddfe-41bc-8bde-8778ff198640>, 2020 年 9 月 17 日閲覧。
- (6) 「OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年調査 PISA 2018 のポイント」国立教育政策研究所、令和元年 12 月 3 日、https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf, 2020 年 9 月 28 日閲覧。
- (7) ・高速 Express コース：中等教育は 4 年で大学受験。
 ・標準（学術）Normal（Academic）コース：中等教育は 4 年で成績が良ければ翌年大学受験も可能。
 ・標準（技術）Normal（Technical）コース：中等教育 4 年のうち高専や専門学校へ。主にコンピューター技術やビジネス・スキル、小売業に必要な知識を中等教育で学ぶ。N レベル、つまり高卒となる学生たちには、より生活に密着した実学的な科目群が用意されている。
- (8) Social Studies Syllabus Secondary One to Four Normal（Technical）Course,
<https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/humanities/files/social-studies-normal-technical-2014.pdf>, 2020 年 9 月 17 日閲覧。
- (9) 高速コースと標準（学術）コースでは社会科は 3 年生と 4 年生の 2 年間のカリキュラム配置されている。教育の哲学とカリキュラムの目的は同じだが、内容は 3 つのテーマから成る。すなわち、①「シティズンシップとガバナンスの探求」、②「多様化した社会に生きる（この Key Understanding は本論で事例とした教科書と同じ）」、③「グローバル化した世界の一員として」である。より深く社会現象の要因について思考し、統計等を駆使して、より理論的に自分の考えをまとめ、プレゼンができることが目標となっている。どちらもアクティブ・ラーニング形式の教授法だが、標準（技術）コースの方は習得型であるのに対し、高速コースと標準（学術）コースでは探求型となっている。

Social Studies Syllabus Upper Secondary Express Course, Normal（Academic）Course,

[https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/humanities/files/2016-social-studies-\(upper](https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/humanities/files/2016-social-studies-(upper)

secondary-express-normal-(academic)-syllabus.pdf, 2020年9月17日閲覧。

- (10) Tan, Teresa and Melissa Sim 'Heavens Away from Home Influx of expats is leading to the transformation of neighbourhoods-and more tasty foreign treats', *The Sunday Times* August 17, 2008, Home p.10.
- (11) シンガポールでは英語が最も話されている言語である。5歳以上の人々が家庭で話す言語として、39.9%が英語、34.9%が北京語を話すとしている。
[https:// www. straitstimes. com / singapore / english-most-common-home-language-in-singapore-bilingualism-also-up-government-survey](https://www.straitstimes.com/singapore/english-most-common-home-language-in-singapore-bilingualism-also-up-government-survey), 2020年9月27日閲覧。
- (12) Streaming into Normal and Express in secondary schools to stop in 2024; to be replaced by full subject-based banding, *Parenting & Education News & Top Stories-The Straits Times*, 2020年9月27日閲覧。

引用文献

- 石井由香 2016「アジアにおける〇〇系概念：国民構築とエスニック・アイデンティティ」駒井洋監修、佐々木てるの編著、『ディアスポラ研究5 マルチ・エスニック・ジャパニーズ——〇〇系日本人の変革力』明石書店。
- 奥村みさ、郭俊海、江田優子ペギー 2006『多民族社会の言語政治学：英語をモノにしたシンガポール人のゆるぐアイデンティティ』ひつじ書房。
- 斉藤里美（編・監訳）、上條忠夫（編）2002『シンガポールの教育と教科書—多民族国家の学力政策—』、明石書店。
- 酒井喜八郎 2014「シンガポールのシティズンシップを育成する多文化教育」『地理教育研究』Mar. 01、2014 (14)、pp. 52-59.
- シム、チュン・キヤット (Sim Choon Kiat) 2009『シンガポールの教育とメリトクラシーに関する比較社会学的研究：選抜度の低い学校が果たす教育的・社会的機能と役割』、東洋館出版社。
- 吉田 剛 2010「シンガポール中学校低学年地理科シラバスにおけるナショナルシティズンシップ育成」『社会系教科教育学研究』第22号 pp. 41-50。
- Chang, Jonnes Han-Yin 2002 '4. Education' in Tong Chee Kiong and Lian Kwen Fee (eds.) *The Making of Singapore Sociology: Society and State*, Singapore : Times Academic Press, pp.130-154.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore
- 2014a. *All About Social Studies Normal (Technical) Secondary 1A Coursebook : Living in a Multicultural Society*, Singapore : Hodder Education.
- 2014b. *All About Social Studies Normal (Technical) Secondary 1B Coursebook : Responding to Migration*, Singapore : Hodder Education.
- 2014c. *All About Social Studies Normal (Technical) Secondary 2A Coursebook : Resolving Conflict and Building Peace*, Singapore : Hodder Education.
- Ho, Li-Ching 2017 'Chapter 7 Harmony and Multicultural Education in Singapore' in Yun-Kyung Cha et al.(eds.), *Multicultural Education in Glocal Perspectives*, Singapore : Springer Nature Singapore Pte Ltd., pp.91-101.
- Lian, Kwen Fee and Ananda Rajah 2002 '8. "Race" and Ethnic Relations in Singapore' in Tong Chee Kiong and Lian Kwen Fee (eds.) *The Making of Singapore Sociology : Society and State*, Singapore : Times Academic Press, pp.221-246.
- Mathews, Mathew and Mohammad Khamsya Bin Khidzer 2015 'Chapter 5. Preserving Racial and Religious Harmony in Singapore', in David Chan (ed.) *50 Years of Social Issues in Singapore*, Singapore : World Scientific Publishing Co. Pte.

Ltd., pp.75-96.

Mohamad Maliki Bin Osman 2015 'Chapter 11. Social Issues in Developing a Community in Singapore', in David Chan (ed.)

50 Years of Social Issues in Singapore, Singapore : World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd., pp.180-204.

【Abstract】

Multicultural Education in Social Studies Syllabus and Textbooks of Singaporean Secondary School

Misa OKUMURA*

Singapore is practicing multicultural education as a part of its national integration policy. The purpose of this type of education is to develop “Harmony in Diversity” in Singapore. In this thesis, the author examines how the idea of multiculturalism is infused in both the social studies teaching syllabus and in the textbooks of “Normal (Technical)” Course in secondary schools. Such textbooks contain many examples of situations that students may encounter in their everyday lives with these examples clearly reflecting the editors’ views of the benefits and challenges that a multiracial Singapore faces. In particular, “Living in the Multicultural Society”, the first volume of the six-volume series of “All about Social Studies Normal(Technical)”, is analyzed in detail. Special interest is also drawn to the English expressions used in the syllabus and textbooks which represent the national policy on multiculturalism in Singapore.

Key words : Singapore, Multicultural Education, National Integration, Multiculturalism, Active Learning

現在、多くの国と地域で多文化教育が実施されている。各社会事情によって教育目的は多様である。多民族国家シンガポールの場合には多文化教育とは国民統合政策の一環であり、「(民族文化の) 多様性の調和 Harmony in Diversity」を教育目的に掲げている。シンガポールの教育の特徴としては英語中心の2言語教育政策、メリトクラシー meritocracy、そして内外の社会情勢の要請に適応した実用主義 pragmatism に則ったカリキュラムがあげられる。多文化教育もこれらの特徴を踏まえている。本研究ではシンガポールの多文化教育の理念がどのように教科書に落とし込まれているか、シラバスのみでなくテキストも取り上げて検証・分析している。本研究の独自性としては、教育理念がより明快に反映されている下位校の社会科教科書(中等学校1年前期)のシラバスとテキストを事例とした点と、検証の際に教育理念・方針を反映している英語表現にも着目した点にある。

キーワード：シンガポール、多文化教育、国民統合、多文化主義、アクティブ・ラーニング

* A professor in the Faculty of Sociology, and a research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University